

小学校と中学校の学びをつなぐ ―校内研修と授業実践を通して―

又野 陽子

実践記録の概要

本稿は、山口県における小中連携推進型少人数指導の取組の一環として、筆者が校区内の2つの小学校を年間を通して日課表に位置付けて訪問した際の6年間（今年度で7年目）の実践をまとめたものである。国語や算数、理科の授業（TT）に T2 として入らせていただいたり、外国語活動あるいは外国語の授業を T1 で行ったりしてきた。小学校の学習内容や学習環境等を中学校の研修委員会や教科部会でお伝えしたり、小学校の校内研修会で外国語活動の模擬授業を行うなど、地域内の学校のファシリテーターとして小中をつなぐ役割を果たしてきた。授業実践においては、外国語と出会う小学校3年生では音に集中して聞く姿勢を大切に育むとともに、児童の発達段階を考慮し、身体化された学びを積極的に展開した。授業規律と豊富なクラスルーム・イングリッシュを共通の土台としながら、小学校3年生から中学生までの学びの連続性を意識した英語教育を自ら実践し、音から文字へと段階を踏んだ丁寧な指導のあり方を提案したものである。

1. はじめに

私は、小中連携推進型少人数指導という取組の一環として、校区内の2つの小学校を日課表に位置付けて訪問し、小中連携の推進と校内研修の活性化を図る役割を6年間継続して担当させていただき、今年度は7年目となった。国語や算数、理科の授業（TT）に T2 として入らせていただいたり、外国語活動あるいは外国語の授業を T1 で行ったりしている。小学校の学習内容や学習環境を知り、中学校の様子をお伝えすることにより、小中での子どもの学びをつなぐ視点を共有する機会となっている。給食や掃除をともにしたり、昼休みに児童と触れ合ったり、小学校配置の外国語指導助手（ALT）の先生と英語でディスカッションをすることもある。小学校を訪問して感じることは、さまざまな教科や領域で具体的な体験が大切にされており、児童がわかりやすい指示や言葉かけがなされていること、話型の活用（例：「まとめると～と言えそうです。どうですか。」）等により話し合いや発表がとても上手にできること、掲示物や標語による意識づけが学級や廊下で効果的になされていることなど、多くのことが挙げられる。丁寧な指導で非常にたくさんのことをできるようにして中学校に送り出されていることを目の当たりにし、それらを大切につないでいかなければならないと改めて思う。本稿においては、小中連携を推進する役割を担う自分の立場から実践してきた事柄を校内研修と授業実践という2つの項に分けて報告する。

2. 校内研修

小学校を訪問しての私の学びを「〇〇小学校を訪問して」というペーパーにまとめ、中学校の職員連絡会や研修委員会で報告し、小学校にもその内容をお伝えしてきた。全員で

声をそろえてのめあてや計算方法などの確認、児童のよさを価値づける声かけ、作業や係活動の進み具合の視覚化、挙手の仕方等、中学校の授業にも引き続き生かしていくことができる内容が多くあること、小学校ならではの事柄、例えばクラス全員で遊ぶ「みんな遊びの日」の様子や赤白帽子が体育の授業だけでなくさまざまな授業や行事で使われていることなどもお伝えした。また、英語の教科部会では児童が触れている教材や活動の内容を示すことにより、小学校での学びを意識した円滑な接続が図れるようにした。

夏季休業中には小学校の校内研修会で学習指導要領改訂のポイントについての研修や模擬授業の依頼があり、児童の興味を引き集中力を高める仕組み、児童の理解を助ける工夫、ほめる声かけ、ハンドジェスチャー等を模擬授業を通してお伝えする機会とすることができた。「授業スタートの第一声で授業に引き込まれる。」「授業のはじめから終わりまでテーマが一貫していて、授業にストーリーを持たせることが大切であることに再度気づいた。」「それぞれの活動がつながっていて、それが繰り返される中でしっかり授業の中で言えるようになっていく。」「子どもが英語を話す回数が非常に多いのでその授業のめあてが身につくと思った。」「つねに認めてもらえることで次へのエネルギーがわいてくる。楽しく活動しながら力もついてくる。今後英語の授業だけでなく、他の学習でも実践できたらと思う。」「テンポよく発音しテンポよくほめる、そのかけ合いがとても心地よく、英語は楽しいと子ども達も感じていると思う。」等の声をいただき、小学校の先生方との交流が私自身の気づきや学びにもつながった。

3. 授業実践－外国語との出会いをつくる（小学3年生）－

音に集中して聞く姿勢を大切に育み、初めて外国語に触れる3年生の児童と外国語との出会いを丁寧につくっていくことを心がけた。児童の発達段階を考慮し、動作や手遊びを伴った歌やチャンツ、アクティビティ等、授業の中に動きを取り入れ、身体化された学びを積極的に展開した。グループの中で互いにやり取りをした際は、たずねるときは相手に語りかけるように言葉を受け渡すようなしぐさでたずね、答えるときは言葉とともに動きをつけて発話をする姿が見受けられた。小学校外国語活動教材¹の3年生最後の単元となる“Who are you?”では、秋の森の中を舞台として動物たちが仲良くかくれんぼをして遊んでいる場面を好きな動物になって英語劇で再現することを行った。まず、第1次で絵本に登場する動物たちが森の葉っぱの中に隠れているという設定で、葉っぱに見立てた丸く切り抜いた緑色の色画用紙で動物の絵カードを隠し、少しずつ色画用紙を動かしながらクイズ形式で動物名を導入した（関連資料1. ①参照）。そして、児童用動物カードを用いてビンゴ・ゲームを行った。第2次では、黒板に貼った絵カードの動物に呼びかけるように、たずねる Are you a ____? → 答える Yes, I am. のやり取りを行い、役割を決めて班練習後、各班ごとに発表した。第3次では黒板に貼った動物の絵カードの上に各動物の特徴（小さい、四角い、こわい、白い…）も板書し（関連資料1. ②参照）、みつける Something _____. たずねる Are you a ____? → 答える Yes, I am. I'm a _____. のやり取りを班練習後、各班ごとに発表した。かくれんぼのオニ役である犬のせりふ“1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10. Ready or not, here I come!”はクラス全員で声をそろえて発話した。第4次では、みつける せりふを I see something _____. とさらに長くして行い、第5次では最終発表を、そしてその次の時間は自分達の名前でリアルなかくれんぼを英語で

行った。毎時間デジタル教材の映像を見たり音声を聞くことも行うことにより、児童の中に英語の音声やリズムへの気づきが生まれ、発表（せりふの言い方）に上手に取り入れていた。ジェスチャー、鳴き声、小道具（something redを表すために赤白帽の赤帽子をかぶる等）の工夫も見られた。スモール・ステップで少しずつ膨らませながら回を重ねて繰り返していくことで、まとまりのある長い話の中のやり取りも発話できるようになっていた。児童からの手紙には「最後には口がなれていて、スムーズにできました。」「じしんをもって英語を話せるようになりました。」「げきで言葉もおぼえて、みんなといっしょにできました。そしてえがおでできました。」とあった。これらの手紙は、年度の最後の訪問日の終わりの号令の際に、“Ms. Matano, thank you very much!”という声とともに手渡してもらったものである。リボンで束ねられて冊子となっており、どのクラスの表紙も私の似顔絵やアルファベットや Thank you.の文字であふれていた。あるクラスは忠実に私の板書（“Who are you?”に出てくる動物の絵をキーワードとともに並べたもの）や実際に行ったかくれんぼの様子を描いていて驚くとともに、とても嬉しく思った。担任の先生方からのメッセージも添えられており、とてもありがたく、温かい気持ちになった（関連資料4参照）。

4. 授業実践－中学校につなげる（小学6年生）－

小学校卒業を前にした出張授業では、中学校の授業にスムーズにつなげていくことを視野に入れ、声の出し方、よい姿勢のあり方、道具の置き方、挙手の仕方等の授業規律を継続して指導した。生徒の理解を助ける工夫を取り入れながら英語のインプットをたくさん聞かせ、クラスルーム・イングリッシュを場面とセットにして理解できるように導いた（又野（2017）参照）。教科としての外国語科が始まる前の出張授業であり、音から文字へ、英語の文字を書くことへの憧れを育み、丁寧に美しくアルファベットを書く指導につないでいく授業とした。振り返りシートには、「すごく勢いのある授業で中学校の英語の授業が楽しみのになった。」「中学校でも一生懸命がんばりたい。」等、中学校の英語学習に対する動機づけにつながったコメントが見られた。小学校の先生方からも「先生の英語を理解しようと子どもたちがとても集中して聞いていた。中学校の授業を感じることができ、貴重な経験ができた。」「この時期に授業をしていただき、4月からの中学校生活に大いに役立った。」という感想をいただいた。

教科としての外国語科が始まると、外国語の教科書²において、各 Unit の Over the Horizon のページ（社会・保健・国語・家庭・総合・道徳などとの関連がある教材）を受け持たせていただくことが多かった。「外国から来る食べ物について考えよう。」という単元で地産地消カレーを考えて対話をする活動では、給食でも使用される地元でとれる食材の絵カードを作成して持参し、各絵カードの下に産地（具体的な市町の名前）を板書して示すことにより、児童が対話をする際に参照できるようにした。給食に使われる材料の産地を栄養教諭の先生に事前に教えていただいて絵とともに示すことにより、児童の興味を引き付け、実際の言語の使用を促すことができた（関連資料2. 参照）。“Let’s eat ○○ curry. The ○○ is from □□.”の発話に対して、目を見てうなずきながら聞くこと、相づちや反応を返すこと等も大切にしながらやり取りができるように指導した。「世界とつながる仕事について考えよう。」という単元では、I want to be ○○. に続けて、どのよ

うなことを今がんばっているかについても述べるなど、発話をつないでいくことの大切さにも目を向けさせるようにした。児童が取り組みやすいように、私 (T1) と担任の先生(T2) とで実際の対話のモデルを示して行うようにした。

5. 授業実践—小学校の学びを大切に受け継ぐ（中学1年生）—

小学校を卒業した子ども達は4月に中学校に入学してくる。最初の学年集会では、「小学校では、廊下で出会ったときみんな会釈をして通っていたね。中学校でもぜひ続けましょう。」と小学校で行われていた良い取組は中学校でも継続することを呼びかけた。また、「英語の授業の基本は、『大きな声で、そろって、はやく』でしたね。Speak loudly, quickly, and together.」と、小学校で私が伝えていた心がけも再確認し、中学校でのスピーディーな口頭練習につなげるようにしてきた。

実際に授業が始まった際も、声の出し方、よい姿勢のあり方、道具の置き方、挙手の仕方等の授業規律やハンドジェスチャーを小学校で指導しているので、非常にスムーズである。小学校で行ったり使用したりした活動、教材、言語材料、教具を中学校でも導入に用いることにより、自然に本時の課題につなげることができる。また、英語の単語を読んだり綴りを思い出しながら書いたりすることができるように導くことは、中学1年生におけるとても大切な指導内容の一つであるが、小学校でジングル等を用いて学んだ音と文字の対応を教具³や松香（1993）を参照した口の形の図等を用いて帯活動として継続して指導し、英語の読み書きを促進する一助とした。教科書⁴中の対話文を板書する際は、必要な時期には複数線引具⁵を用いて、文字及び符号の正確な書き方の指導を小学校から引き続き積み重ねていった。やり取りの発表の際は、映画で使う clapper board⁶も活用して雰囲気づくりをした（関連資料3. 参照）。こうして小学校から中学校へ丁寧に学びをつないでいき、生徒が創意工夫を生かして言語使用を行う段階まで一貫して導いていく授業を展開した（又野（2021）参照）。

生徒の振り返りコメントには、「小学校でやったことを思い出しながらすることができました。」「小学生のときに習ったことを生かしてできたのでとっても簡単でした。」「小学校で習った文に組み合わせると、他の文ができてすごいと思いました。」というのが見られ、学習の継続性を実感できるような授業をつくっていくことは生徒の自信や安心感にもつながるのではないかと思われた。さまざまな場面で小学校での学びを活用しながら、生徒の発達段階や興味・関心に応じて膨らませ、成長が実感できるようにしていった。

小学生の頃からともに過ごしてきた生徒達の中学1年生の最後の英語の授業の振り返りシートには、「とてもとても楽しく英語を勉強することができました。英語の授業がくるたびに心の中で『やった！英語がある！』と毎回毎回思っていました。」「最初はアルファベットの練習から始めて、単語が書けるようになり、葉書まで書けるようになりました。」「目に見えて成長しているなと思いました。」「先生に土台となる部分を作っていただいたので、これからも生かしていけたらいいなと思う。」「2年生になっても英語の先生が又野先生でありますように。」…ととても嬉しいコメントが並んでいた。そして、修了式の前日や当日、職員室に生徒達が手紙や色紙を持ってきてくれた。小学校での私との出会いについて綴ったもの、習った英語の手紙の書き方に倣って美しい文字で英語の手紙を書いてくれたもの、美しい筆記体で色紙にメッセージを書いたものを手にし、とても幸せな

瞬間だった。「クラス替えがあっても、先生、みんなのこと忘れないよ。」と言った私に対する生徒の返事は、「僕達も絶対忘れません。だって、僕達、小学生のときから先生の授業を受けているんですよ！」だった。

6. おわりに

日課表に位置付けて定期的に継続して小学校を訪問して学習指導に入らせていただくことにより、児童の様子や学習内容、学習環境を知り、それをどのように中学校につないでいくのかについて小中全体で考える機会となった。実際に訪問することで、小学校卒業後、中学校でもがんばっている様子を旧担任の先生に直接お伝えしたり、小学校英語専科の先生と小学校での既習事項や児童の様子について教材や児童のワークシートをもとにお話したりすることもできた。小学校3年生から中学生までの学びの連続性を意識した英語教育を自ら実践し、音から文字へと段階を踏んだ丁寧な指導のあり方を提案し、小中の先生方との研修を深めてきた。

継続した小学校訪問と授業への参加は、小中のスパンで子ども達の学びを縦断的に見通し、引継ぎが必要な児童にきめ細かい支援を行うことで中1ギャップの解消につなげることもできる取組であると思う。生活規律や学習規律等、指導方針を小中で共有し、中学校区で児童生徒の発達段階に応じ、具体的な共通実践による継続指導をこれからも充実させていきたい。そして、地域内の学校の校内研修のファシリテーターとして、校内研修体制や授業改善への取組をより一層充実させ、その成果を広く普及（波及）し、小中学校9年間の切れ目のない地域ぐるみの支援体制等の一助となるよう努力を続けていきたい。

【注】

- 1 文部科学省. (2018). 『新学習指導要領対応 小学校外国語活動教材 *Let's Try! 1*』 東京：東京書籍株式会社.
- 2 アレン玉井光江・阿野幸一・濱中紀子他. (2020). *NEW HORIZON Elementary English Course 6*. 東京：東京書籍株式会社.
- 3 *Phonics Builder*. David English House. (広島市中区中町)
- 4 笠島準一・関典明他. (2017). *NEW HORIZON English Course 1*. 東京：東京書籍株式会社.
- 笠島準一・阿野幸一・小串雅則・関典明他. (2021). *NEW HORIZON English Course 1*. 東京：東京書籍株式会社.
- 5 「複数線引具（教室のせんた）4線」（吉野ガーデン）
- 6 「カチンコ」（内田洋行）

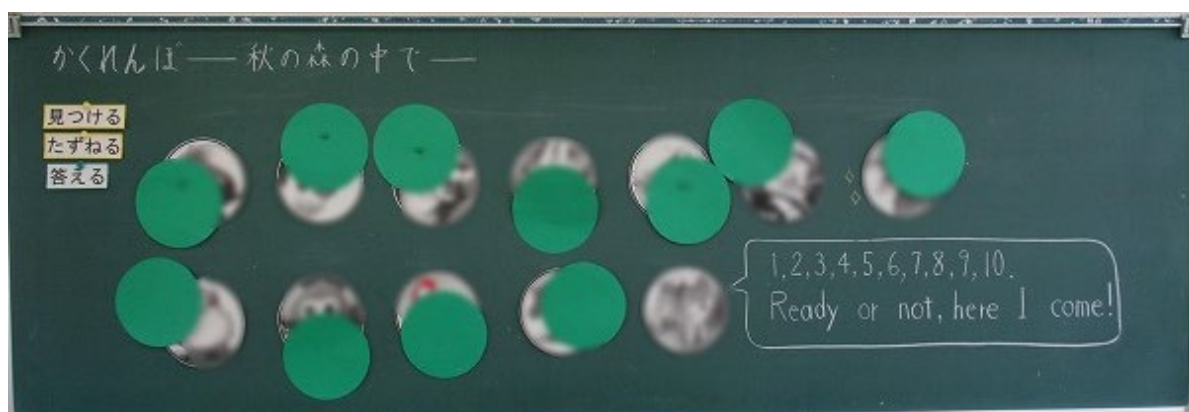
【参考文献】

- 又野陽子. (2017). 『中学校英語サポート BOOKS はじめてのオールイングリッシュ授業 —今日から使える基本フレーズ&活動アイデア—』 東京：明治図書出版株式会社.
- 又野陽子. (2021). 「生徒の言語活動を促す授業づくり」『英語教育』12月号. pp. (3)-(4). 東京：大修館書店.
- 松香洋子. (1993). 「つづりと発音をどう教えるか」『英語教育』5月号. pp. 26-28. 東京：大修館書店.

【関連資料】

1. 授業実践—外国語との出会いをつくる（小学3年生）—

①



- 絵本に登場する動物たちが森の葉っぱの中に隠れているという設定。
- 葉っぱに見立てた丸く切り抜いた緑色の色画用紙で動物の絵カードを隠し、少しずつ色画用紙を動かしながらクイズ形式で動物名を導入。

②



- 黒板に貼った動物の絵カードの上に各動物の特徴（小さい、四角い、こわい、白い…）も板書。

- 各動物の特徴を児童が自らのアイデアで工夫し、英語劇内で表現。

例：ジェスチャー、鳴き声、小道具の使用（something redを表すために赤白帽の赤帽子をかぶる等）

- かくれんぼのオニ役である犬のせりふ “1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10. Ready or not, here I come!” はクラス全員で声をそろえて発話。声をそろえて言うための出だしの合図も児童（Volunteer!として挙手）による。

- 言語機能（「みつける」「たずねる」「答える」）により会話の流れを示す。

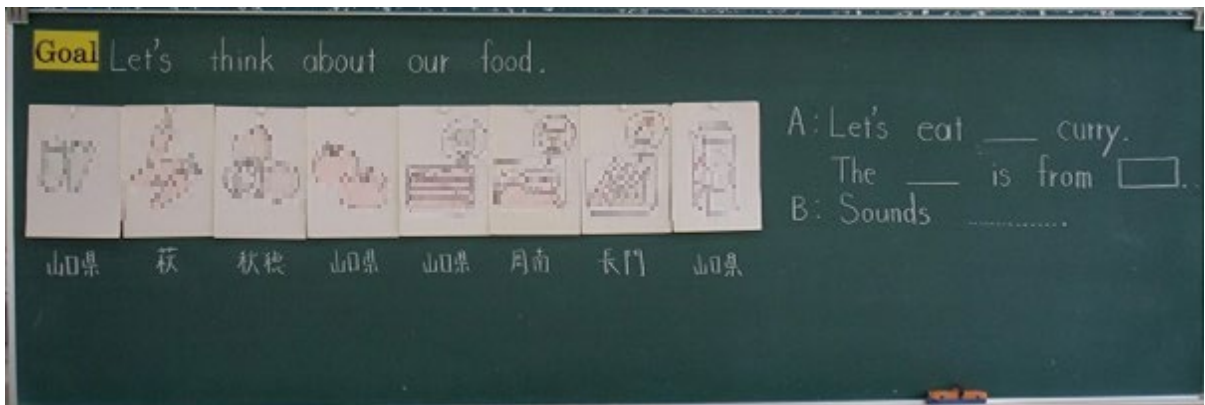
みつける I see something _____.

たずねる Are you a _____?

答える Yes, I am. I'm a _____. のやり取り。

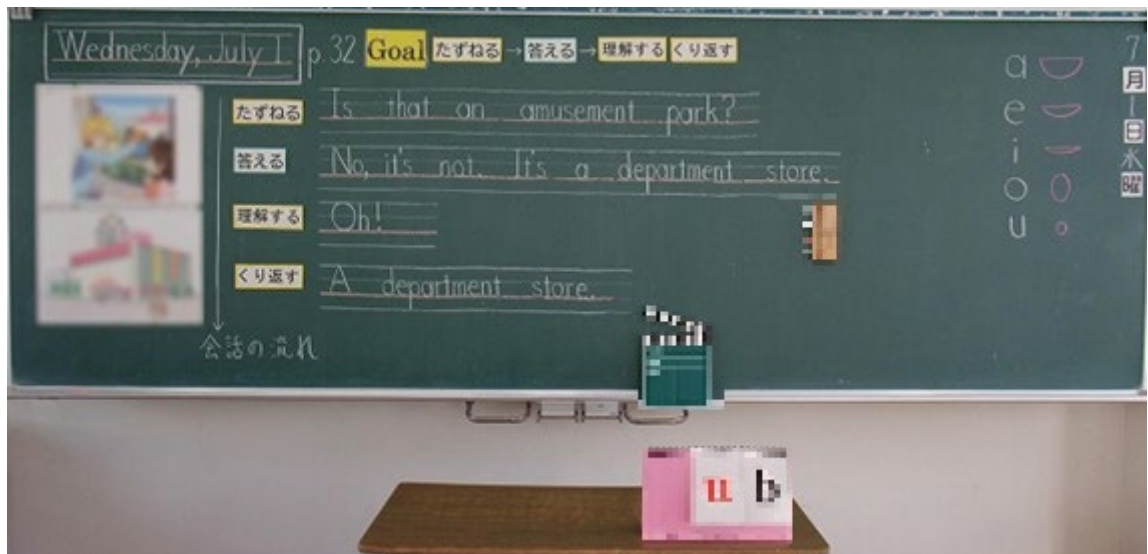
スモール・ステップで少しずつ膨らませながら回を重ねて繰り返していくことで、まとまりのあるやり取りも自信をもって発話できる。

2. 授業実践ー中学校につなげる（小学6年生）ー



- コミュニケーション活動と同じテーマを、身近なことや他教科につなげて、学びをより豊かにする。
- 給食に使われる材料（地元でとれる食材）を描いた絵カード。下に産地を板書。
- 栄養教諭の先生との打ち合わせ（地産地消カレー）。
- 目を見てうなずきながら聞くこと、相づちや反応を返すこと等も大切にしながらやり取りができるように指導。
- 筆者（T1）と担任の先生(T2)とで実際の対話のモデルを提示。

3. 授業実践－小学校の学びを大切に受け継ぐ（中学1年生）－



- 小学校からの学習の継続性を実感できる授業。
- 小学校でジングル等を用いて学んだ音と文字の対応を教具（*Phonics Builder* (David English House)）等を用いて帯活動として継続して指導し、英語の読み書きを促進する一助とする。
- 図を描いて発音指導。文字（a, e, i, o, u）の横に口の形を描いたものを提示。（松香（1993）参照）。音読みで全員で発音。
- 複数線引具を活用して板書。四線上にていねいに書くことを促す。
- 言語機能（「たずねる」「答える」「理解する」「くり返す」）により会話の流れを示す。
- やり取りの発表の際は、映画で使う clapper board も活用して雰囲気づくりをする。

4. 冊子



（山口市立鴻南中学校）